

## JOMF 派遣医師便り (2016. 2)

### ◆シンガポール◆

### デング熱増加傾向

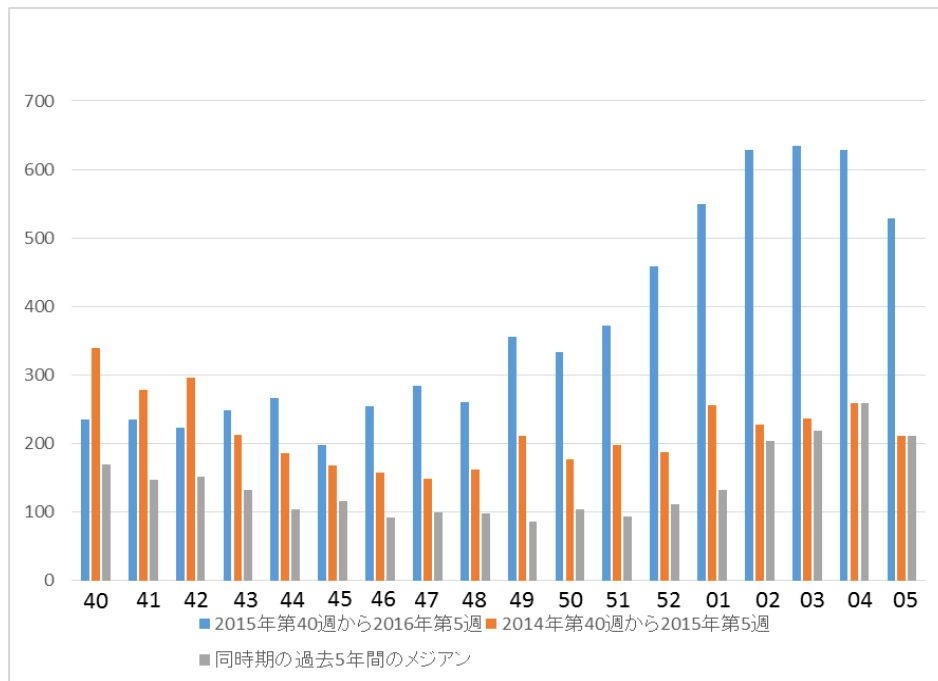
シンガポール日本人会クリニック

日暮 浩実

シンガポールでは、昨年10月下旬ごろから徐々にデング熱ウイルスによる患者の発生が増えてきます。2月18日、シンガポール保健省(MOH)は、今年は年間の発生数は3万人を越えるのではないかという見解を発表しました。

ー昨年(2014年)の年間のデングウイルス(デング熱/重症デング)患者の発生数は18,338(18,318/20)人で、これは2013年の22,170(22,077/93)人に次いで2番目に多い記録でした。昨年(2015年)は11,298(11,286/12)人となり減少傾向でしたが、昨年10月下旬ごろから週当たりの患者発生数が前年の2014年を上回るようになり、11月末からは毎週、警戒レベル(過去5年の週平均患者発生数に標準偏差の2倍数を加えた数=252名)を越えるようになりました。そして、その後もデング熱の患者数が増加の傾向にあり、今年1月には毎週のように600名を越える患者数を記録しました。先週の発表では一週間で528名とやや減少傾向を示しましたが、年初からの5週間で患者数は既に2,960(2,956/4)人となり、これは過去5年のメジアンである1,110人の3倍近い数に上っています。(図1参照)

図1 デング熱週当たり患者数推移(前年の第40週から翌年の第5週まで)



当局は、2015年からのエルニーニョ現象によって、普段よりも気温の高い日が続いているため、蚊の発生数が増えていると考えられること（実際にいくつかの地点で蚊の発生数が50%程度増えていることが観測されています）、また、同時にデングウイルスの血清型の変化（今まで優勢であった DENV-1 から今では DENV-2 が 2/3 を占めるように変化した）が認められることなどが、今回の患者数の増加と関連していると指摘しています。

シンガポール国内では、まだ、デングウイルスワクチンが認可されていないこともあり、個人が、うっかりデングウイルスの発生源を作らないように注意することが予防策として重要です。当局からは、個人でできる 5 steps Mozzie Wipe-out という方法が推奨されています。これは、今までにも何度かご紹介しましたが、花瓶の水を替える、植木鉢の受け皿に水をためておかない、バケツなどは伏せて水がたまらないようにするといったごく簡単な内容で、蚊の発生源となるため水をつくらないことが大切であることが喧伝されています。また、当局は、患者発生数が多い地域では写真1のような垂れ幕を掲げて警戒意識を高めるようにしています。

デングウイルスを媒介するネッタイシマカは今、懸念されているジカウイルスを媒介する蚊でもありますので、その発生数を減らすことは危急の課題となっています。



写真1 (Dengue Alert, Red)

1月26日、東京医科大学海外渡航センターの主催で、シンガポール日本人会、日本人小学校で、〈熱帯地域における感染症の予防策〉と題する講演会が実施され、デングウイルスを始めとする感染症についての説明の他、子どもたち向けには実習がありました。防蚊の意識をさらに高めることにつながったのではないかと期待しています。